

佐伯史談

第九十九号

「郷土史研究」誌
通算百二十一号

昭和五十年三月十三日発行

佐伯史談 会

事務所 佐伯市大字稻垣宮藤養寺 羽柴方

報告

佐伯城三ノ丸櫓門

昭和の修理について

佐伯史談会

会員 小野 英 治

佐伯城三ノ丸櫓門の修理工事もほぼ完成に近づき、後仕上り工事ともいえるしつこい工事と、付帯工事を二、三残すのみとなりました。

この櫓門の修理は櫓門保存会の手により、毛利家、佐伯市、南海部郡を中心とした有志の協力で出来たもので、中心的存在であったようです。

昭和五十年の今年度、佐伯史談会の機関誌「佐伯史談」が、百号を数えます。この時に、文化財三ノ丸櫓門修理が完成する。まさに記念すべき事業であると思えます。

この記念すべき修理工事も、古建築ゆえに種々難問が提起され、着工

前、工事中とその工法につき、日本城郭建築の権威で前名古歴工業大学教授城戸久先生、大分県文化財専門員で大分工業高校建築科教諭村松幸彦先生方のご意見を伺い、その都度請負施工者の曾宮氏と打合せ、かつ毎日入場し、櫓門保存会からは、清田義雄氏が修理工事の現場に立会い、細部における工事の打合せ、記録等の任に当たっていただきました。

この面倒な古建築の修理工事を、自信をもって引受けていただき、難かしい註文も、誠意をもって応じて下さった曾宮衛吉氏の協力がなかったら、こうスムーズにいかなかったのではないかと思われ、大いに感謝していただきます。しかし、今後曾宮氏のような宮大工は次第に少なくなっていく事でしょうから、そんな観点か

本号の内容

- 報告 櫓門昭和の修理（小野英治）……
- 研究 明治初期の学校教育（成沢武彦）……
- 研究 緒方姓について（佐脇貞一）……
- 調査 馬場神社の競馬会（津久野誠）……
- 調査 羽柴方の馬と佐伯……
- 記録 津生新洞の概要（羽柴康孝）……
- 紹介 宮尾神社の神桶と杖筒（山崎信三）……
- 記録 同 奉納神楽（多田厚吉）……
- 研究 横川先生と佐伯（山本保）……
- 伝承 竹野浦河原物語（吉田勝二）……
- 感想 河原の伝承と支持する（羽柴弘）……
- 研究 明治初期の漁業（安部裕吾）……
- 記行 早春の日向地へ（富沢泰）……
- ふる里と結びた歴史とゆかり
- 報告 水瀨山部落のまつり（松本）……
- 委員会内 賛助寄付お礼
- 会費受領・入会退会・正誤
- 編集後記



らなければ、よい時期の修理工事であったと思えます。

文化財建造物としての修理は、今日一般の住宅建築と異なり、面倒で金のかかるものです。しかし、これが市の文化財になり、やがて県の文化財、さらには国の文化財ともいう段階になれば、この事は重要で、安易な修理は出来ません。

さて文化財建造物の修理で最も重要な事は、変更しないということではないでしょうか。これは簡単なことのようにでなかなかむつかしい事です。

先づ古束もつてきた工法、用いたそのままの材料を使わなければなりません。この櫓門の場合、創築、修築時の建築面の古文書、古図等の資料が皆無ですから、一応現状のまま修理復元という事になりました。

今回の修理の特徴は、榎材から上りまとして全面的に修築しています。従来化粧垂木(注二)には、松の良材(赤松)が使用されてきました。気味(注一)には、松の良材は、なかなか入手出来ないところから、より耐蝕(注三)に強く、耐久性のある榎に変更しては、という申入れがありました。しかし幸い、曾宮氏が奔走して松の良材が入手出来、今回はすべてこれに統一して取り替えることが出来ました。もちろん、古色をなすため着色していますので、櫓門全体から見ては、そこだけ新しいという感じはいたしません。

次に、野地であるところの瓦の下地が、従来小舞板を蹴らに打った上に杉皮を張り、その上に瓦土きのせ、本反葺きとしていたのですが、現在は杉皮がありません。(杉皮をとっていないのです) そこで、仕上げも美しいし、今回は小舞を密に打ち、ルーピング張りとし、その上に瓦板を打ち土を置いて、本瓦葺にしただけのよいのではないかと、施工者の方から申し出がありました。こ

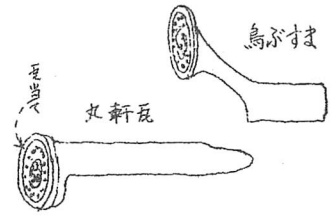
れは文化財の修理上適当ではないにしても、杉皮(もしくは秋皮)が大量に早急に入手出来ず、困った問題でした。しかし、どうしてルーピングでは不可と意見統一をいたしましたところ、曾宮氏は尽力して名古屋布から杉皮を引くことに成功、これを杉皮のかわりに使用することになりました。勿論杉皮の方が杉皮よりはるかに上等で、しかも耐久力はあるからすぐれていますが、それだけに高価につくわけです。この点も曾宮氏の奮発努力を買わなければなりません。とにかく杉皮の入手出来ない今回の場合の処置として、最良の策となりました。

なお、小舞が疎らに打ってあったことは、自動鋸のなかった昔としては、小舞板はなかなか貴重なもの。それで材料の節約から、小舞を間隔をあけて疎らに打ったという説があります。しかし私見、その外に先人の知恵があったと考えています。つまり間隔をあけて通気性を考慮してのことではないでしょうか。

間くところによれば、密に小舞をうち、ルーピングを敷き、五枚を設けてこれに土を置き、瓦を葺いた場合、不幸にして雨洩りをおこし修理という時に、その腐朽の甚だしいのに驚くといえます。

これが旧来の葺き方、小舞を間をあけてうち、杉皮を竹で止め、瓦下の土は瓦の谷むけにウネ状に置いたらどうか。よし雨もりがあっても、通気性というものが大きく影響し、すぐ乾いて容易に腐朽しないということではないでしょうか。永い経験から生じた工法には、学ぶべき点が多々あると思おられます。

さて、瓦については、旧来のものを全面的に使用してあります。これはすべて一枚一枚水洗いをし、乾燥したものを再使用しています。再使用に耐えないものも多くありました。特に丸軒瓦(四)で瓦当りのないもの、嵩



瓦の破損しているもの等、役所のそれは困りものでしたが、幸い先年取壊された旧御殿や、西谷の長屋門に使用の古瓦を保管してありましたので、これ十分間に合わせることが出来ました。村松先生の話にもありましたが、文化財建造物の修理ともなれば、材料の乏しいことが一番困る事でしょう。古建築の取壊しの際には、瓦に限らず、良質の古材も努めて引きのけ、保存保管しておきたいものです。

さて、修理前のままの姿にするといつても、多少の變化は生じています。先ず、棟の両端にある鬼瓦の上の鳥倉（とりぶすま、輪揚図）が加えられました。これは元來あったものが破損し、そのまま補修されないうまま間に合せていたもので、これが復元されました。それと、切妻の鬼瓦が従来なく、シツクイで型どっていましたのを、鬼瓦としています。これも当初からシツクイで型をつくるなどしていません。古ようど手ごろを鬼瓦があり、また一組は矢筈袋入りのものを蒲江の長瀬氏から寄贈さうけましたので、以前よりはずつと体裁がよくなりました。

次に、これは解体が進むにつれて気づいたことですが、従来江戸時代は別として、明治になっては大きな修理はなされていまいと考えられていたこの櫓門も、所々に洋釘や針金をなど、明らかに明治期の修理と思われる材料の使用が発見された事から、古老に聞いたが修理の行われた記憶はないという。ところがたまに、櫓門内部の贅に、墨書で「明治十年九月廿五日書之」と記したものが

発見されたので、この頃いくらかの修理がされたのではないかと推測されます。明治十年といえは西南戦争の年で、薩軍はこの年五月二十六日佐伯に未襲し、城内に侵入器物を破壊（明治丁丑豊後西南戦記による）して、それから、当時この櫓門も相当の被害を受け、それを修理したとすれば、この洋釘、針金など使用のことは納得出来ます。

櫓門の解体修理の初めはご覽の方は、あるいは気が付かれたかと思いますが、平瓦の裏側に、実にさまざまのへら書き模様が、力強く描かれています。それも同じものは全くなく、清田氏はよくスゲツキしてありますが、この中には瓦師の名と記したへら書きの文字もあり、瓦師の個性が感ぜられ、興味ある事です。

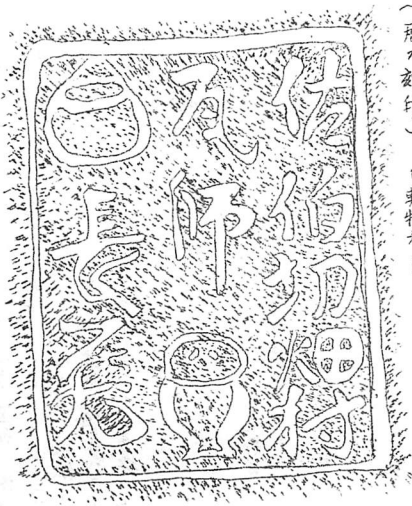
瓦師といえは、瓦の口口に刻印で、**【細瓦師和作】** とか、

【細知】、佐伯切畑村瓦師長藏」などみられます。またへら文字では「細邑瓦師云々」の記入があるのと、他に「、切畑村云々」の刻印のあるところから推察して、切畑村大字細田ではないかと思え、細田の古老に尋ねてみま

したが、細田には瓦を焼いたという伝承はないようです。

しかし、切畑村瓦師長藏について、切畑村（現赤生町）須平部落で、藤原常

男氏の先祖が、旧藩時代御用瓦



（瓦の刻印） 一実物大！

師であり、常男氏より二代前までは、代々長蔵が家名であつたことが判明いたしました。同家には古文書類も所蔵してありますが、これは現在弥生町文化財調査委員の古藤田太氏が調査中であり、これによつて「細色和作」については何が解明出来るのでないかと期待しています。鬼瓦には「佐伯切畑村瓦師長蔵」の刻印があり、丸瓦、平瓦には「細色和作」の刻印、へら書が見られますので、長蔵の弟子に当るのが和作であり、細田色からきていた職人ではなかつたかと推測しています。

なお、これらへら書きの銘入瓦や、刻印瓦の教種は檜門内に保管してありますので、いずれ資料館でも出来れば、そこに展示されることになると思います。

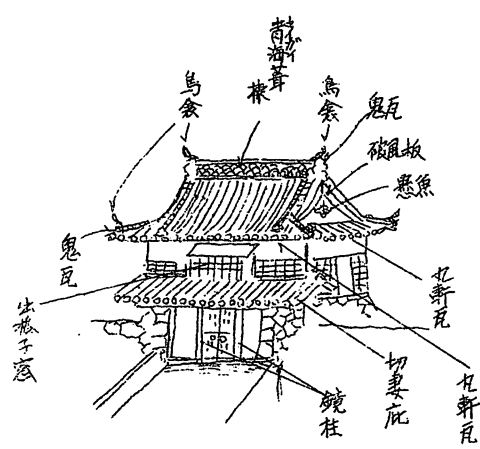
シツクイで化粧された檜門を見られるのも、そう遠いことではないでしょうが、外観からはわからないうちに、檜門内部構造の詳細が、今回の修理工事によつて私達も知ることが出来ました。これは大きな喜びです。今回の修理工事の記録を、ぜひ後世に残したいのですが、それはいかなる方法がよいか、これもまた檜門保存会の仕事の一つでしょう。

今回の修理は、種々の事情から中修理といえるもので、まだまだ取替えを要すると思われる箇所が、何か所が残されています。風蝕(一)は、腐朽では、主要構架の構造には、さほど影響を与えない心配は先ずなくなり、たが、白アリの被害が驚く程多く、これは一応の予防処置を施してはいますが、今後の白アリ対策は、檜門保存上重要な課題となっています。

(注) 化粧母木は軒先にある垂木で下から仰いで見る分、これに對して、屋根葺材を直接つけている垂木を野垂木という。
(注二) 風蝕は、風雨によるもので、水自体が腐つて見える風化現象。風

(参考)

檜門各部分の名称



雨の最も多い当る箇所、例えは破風板や懸魚が風蝕が進む。椽材で、百年に三センチもやせていくという。杉に木は松の何倍も早く風蝕する。今回の修築では、まだ大丈夫として、破風板と懸魚は、とりかえずやります。た。(これはあとからでもとり換えることが出来るから)

檜門修築工事の現状と今後の取進め (事務局より)
瓦下の土の乾燥を待つのと、漆喰の凍結を避けるために、十二月下旬から休んでいた工事、数日前から再開している。破風(塙の殻を焼いた石灰)を引く、油、ふりのりなどをえらび、入念な仕上げ作業がはじまり、三月の中頃までつづかろう。
なお付帯工事として檜門前の石畳の目地の打ちかえ、檜門部の修理もやめては止まる。いたんでいる所は、この際修繕をして、今後の利用、活用も悔いがないよう、この際手入れをしたい。

竣工は三月下旬になるだろう。おもしろい入念に、急がずにやりたい。
会員一般の寄付は尚受けつけをづけています。